

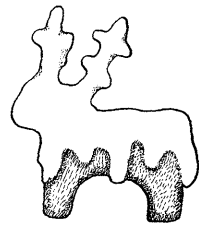
# 私が経験した

## 『保母』という仕事

——その二——

子どもとのかかわりから

四宮 美帆



二年間勤務した保育園を退職した直接のきっかけは出産だったが、保育園という環境の中で自分の思いとかけはなれた保育しかなかったことや、他の職員との関係がうまくとれなかったことが退職を決意させた大きな理由になった。今回は子どもとのかかわりという視点から二年間の記録

を振り返ってみたい。

子どもとかわったことについての純粋な記録は数少ない。それは前回書いたように大人（職員）との関係に多くのエネルギーを費やしていたことが理由の一つである。私の勤めていた保育園

では、保育や子どものことについて話し合う時間が十分になく、そのために職員どうしが思いや意見を交換することが十分にできなかった。私はそのような中で、先輩保母からの自分への評価ばかりが気になり、そのために不安にもなり、自分の保育に集中することができなかった。また、日々の生活の中で子どもの生き生きした姿を嬉しく思ったり、子どもの何気ない言動に感じいったりすることは幾度となくあったが、そのことよりも私の心の中を大きく占めていたのは、保育園という環境の中で、自分の理想とは程遠い保育しかできないことへの悩みだった。それゆえ数少ない記録のほとんどは、子どもの姿の記録ではなく、自分の心中の記録となっている。

平成八年五月十六日

大勢の子どもを一人の大人が保育するとなる

と、子どもの注意をうまくひきつける技が必要になってくる。その技をもちつつ、子どもの気持ちに共感することで、場も混乱せず、且つ子どもの気持ちを尊重した保育ができるのかもしれない。しかしこの技は、ほとんどの場合、子どもを守る大人の視点からのものである。そうになると大人の視点をもちつつ、子どもの心に共感しなければならぬことになる。なんだか矛盾していて難しい。

平成九年四月十一日

十七人の子どもとつきあっていると、聞いた話もあるし、受け入れたいこともあるが、状況的に受け入れられないこと、私が精神的に受け入れられないことがたくさんある。子どもの思いを大切にしたいと思い、一人一人の言葉に丁寧に耳を傾けていると、十七人分もの思いを

とても受けきれなくて、爆発しそうになる。

——中略——個々の伸び伸びとした活動を尊重しながらも、集団生活をする上でのある程度の決まりは守ってもらわなければいけない。同じ決まりに対しても、心の負担はその子によって違うが、一方には許し、一方には許さないというのも都合が悪い。

平成九年五月二十八日

子どもを受け入れるということ。

子どもの思いに耳を傾け、その子がその子らしく過ごせるよう援助する。そのことは良く分かっているつもりだが、実際子どもと向き合う場面になると、迷いが出てくる。こちらの意図にそった活動、習慣、常識ばかりを押し付けてはいけませんが、ある程度それがないと集団の生活はできなくなってしまう。その子の思いを叶

えてあげた方がいいのか、全体を考えて我慢してもらった方がいいのか。——中略——外で遊

びたい人、テレビを見たい人、寝たい人、それを一人一人がやり出したら全体の不都合になってしまう。それをどこまで説明し、協調してもらっていくか。考え出すと分からなくなっていく。

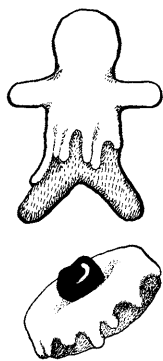
平成九年七月二十八日

子どもとのかかわりの中で子どもを受け入れる余裕をなくしている。一人一人と向き合い、現状の中で何ができるか、限界まで頑張れているか。一通りの仕事だけこなして、自分を守ることで精いっぱい、子どもに無理がいつているのではないか。私にも限界があるにしても、そのずっと手前のところで妥協して、妥協とも思わず、関係を力で解決してはいないか。

平成九年九月二十二日

とにかく疲れた。子どもにも楽しく提案したい  
と思いつながら、その余裕がない。何のための発  
表会なんだろう。『やりたいことをやる』『やら  
なければいけないこともある』どちらをどれだ  
け伝えればいいのだろう。歌を歌う、みんな  
声をそろえる、決まりを守った表現をする、挨拶  
をする、そういうことは大切なことなのか、  
それでもないことなのか。——中略——わたし  
がやろうと決めたことに子どもがついてこない  
とき、何が魅力的じゃないのか、どうしたらつ  
いてきてくれるかを一通り考える。それでも余  
裕がないときには『何でやらないの』としかっ  
てしまう。確かに、何でやらなければいけない  
んだらう。周り（他の職員）からのプレッ  
シャーを私が受けられない分、子どもにつけを  
まわしている。

私は何よりも子どもの数の多さに戸惑った。一  
人の保母が担当する子どもは幼児なら二十〜二十  
五人、乳児なら五〜十人。交代勤務もあるので、  
多いときは幼児なら五十〜六十人、乳児なら十五  
〜二十人の子どもを一人で保育しなければなら  
ない時もあった。そうになると、一人一人の思いを受  
け止めるどころではない。大勢の子どもが限られ  
た空間の中で安全に過ごせるようにすることで精  
一杯である。私にとっては一人で二十人程の幼児  
と関わることも難しいことだった。それぞれの子



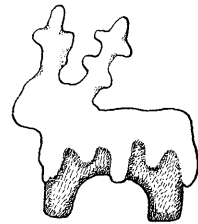


が生理的リズム、感情のリズムをもっている。それぞれの子が興味、好奇心、意欲をもっている。それを限られた環境の中でどう発揮してもらおうか。また私がどの程度一人一人の子に向き合えるか。無力感と反省の毎日だった。しかしそのうちその感覚は麻痺し、とにかく次から次へと現れる行事の企画、形にしなければならぬ製作物、書類書き等の『仕事』に追われる余り、子どもとの関わりについて考えなくなってしまう。だんだんと要領を得、『集団』になった子どもを動かす技術』を使って、子ども達をタイムテーブルにしたがって流しているにすぎなかった。その流れに乗れない子は怒りもしたし、たたきもした。その子の気持ちなど考えもしなくなった。子どもとのそういう関わりは後味の悪いものだったが、以前のように悩んだり、反省したりすることはなくなつた。とにかく形ある『仕事』をこなせるようにな

ることによって、先輩保母からの評価が高くなり、関係ができてくるに従って、ますますその目を無視することはできな

くなつた。評価されることは正直いって嬉しく、私のやりがいにもつながってきたのである。そのことがますます子どもとの関係をないがしろにすることを助長した。

保育園での生活は、子どもにとっても大人にとっても『集団』ということが第一にある。集団の構成員それぞれが集団の良さを経験しながらも、個として充実して過ごせれば何よりもいい。しかし集団である以上、完全に一人一人にとって理想的な自己実現の場であり得ないのが現実だろう。様々な障害、矛盾が存在するはずである。む



しろ完全になり得ない現実を受け入れて、その中にこそある良さや面白さを積極的に生かしていくことが大切なのだと思う。私は保母として子どもに対し、必ずしも思い通りにならない現実の中で、どうやったら自分をコントロールして楽しむことができるか、その手段を教えたり、きっかけを与えたりしていけば良かったのだと思う。また私自身もそのような視点をもって日々過ごせば良かったのだと思う。

今、仕事を離れて思うのは、私は集団となった子どもと関わること自体に戸惑い、しかも一人で相手にする子どもの多さにも戸惑っていたのだと思う。それに加え、本来ならそれらのことを共に乗り越えていくはずの仲間の力を借りることができず、どんどん余裕や自信をなくしていったのだ。この先この仕事を続けていけば、まだ先があったと思う。少しずつでも私なりの保育ができ

るようになったかも知れない。今の段階、私の能力では一度に二十人の子どもの気持ちを受け入れることはできなかったし、保育園という物理的、時間的制約の多い環境で（もちろん同時に守られていたことも多いのだが）、私らしい保育をすることはできなかった。どうすれば良かったのか、それで私は何ができるのかはよく分からない。しかしいまだに学生時代に興味を持った『子育て支援』に対するこだわりは捨てきれずにいる。いつかはなんらかの形で必ず実践したいと思っている。そのとき、今はただ苦いだけのこの保育園での経験が生きてくれればいい。

（元神奈川県公立保育園）